民俗学

７．いのる－信仰－

菊地暁 folklore.lecture@gmail.com

＊「民俗知識 folk knowledge」あるいは「兆占禁呪」

＊まじなう：無限の「欲望」と有限の「手段」のあいだ

・呪術 magic：超自然的存在の力をかりて何らかの目的をとげようとする行為

・模倣呪術（imitative magic）：類似の原理（ex.雨乞いに水をまく）…隠喩 metaphor 的

・感染呪術（contagious magic）：接触の原理（ex.他人の毛髪を使って呪う）…換喩 metonymy 的

＊いのる：無限の「世界」と有限の「個」のあいだ

・宗教 religion：「超越的絶対者」「神聖なるもの」に対する信仰 belief＋行事 practice

→不可避のトートロジー：「超越的」「絶対者」「神聖」…とは？

・宗教の分類

　創唱（founded）宗教／自然（natural）宗教：教主、教義、経典、教団の有無

　世界（world）宗教／民族（ethnic）宗教：信者集団の属性

→民俗学の主たる関心は「民俗宗教 folk religion」「民間信仰 popular belief」

・宗教の起源：死、夢、熱狂 etc…

＊まじなう／いのるの「日本的」特徴

・汎神論的性格：アニミズム（animism）、多神教（polytheism）／一神教（monotheism）

・状況的性格：タマとカミ、神と妖怪、御霊信仰（菅原道真、牛頭天王…）…

・重層的性格（シンクレティズム syncretism）：神仏習合　→廃仏毀釈の混乱を経て持続

＊宗教進化論(呪術→宗教→科学)の破綻

・「宗教」概念の西洋的偏向（宗教革命後、大航海時代の非西欧宗教「発見」→ビリーフ中心主義）

・必要性と統御可能性のギャップ

・理解欲求と理解力のギャップ

・practical と magical の連続性

→遍在する「呪術・宗教的なるもの」

	超越性	体系性	統御性
呪術	○	×	○
宗教	○	○	×
科学	×	○	○

＊文献

Ｊ・Ｇ・フレイザー1951-52『金枝篇』岩波文庫

関一敏・大塚和夫編 2004『宗教人類学入門』弘文堂

末木文美士 2006『日本宗教史』岩波新書

阿満利麿 1996『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書

梅棹忠夫他 1976「神々の分業：日本人の宗教と信仰心について」梅棹他編『日本文化と世界』講談社現代新書

岩田文昭・碧海寿広編 2020『知っておきたい日本の宗教』ミネルヴァ書房

大谷栄一・菊地暁・永岡崇編 2018『日本宗教史のキーワード：近代主義を超えて』慶應義塾大学出版会

神々の分業●座談会

●日本人の宗教と信仰心について

〈司会〉加藤秀俊・米山俊直
伊藤幹治・梅棹忠夫
窪　徳忠・竹田聽洲
林屋辰三郎

加藤　今日の大座談会の主題は、日本におけるさまざまの神様が生活の上でどんなふうに役立っているかという、一種の宗教機能論を考えてみようということです。

日本人は宗教的でない民族だという見方が一般的ですが、考え方によってはむしろ日本人ほど宗教的な民族はあまりないのではないでしょうか。日常生活の道具ひとつひとつにまで神様が重なっている。オシャモジにだって、お酒にだって、神様がいらっしゃる。いまの生活習慣のなかにも、そういうものが形を変えて浸透しているということです。ここまで宗教が生活にしみこんでいる国は少ないでしょう。今日は、それぞれにご専門の先生方から、日本人の暮しと神様・仏様・魑魅魍魎にいたるまでのかかわり合いを論じていただきたいと思っております。

レリージョンとビリーフ

米山　日本人は宗教心のない国民か、それとも宗教心の強い国民か、ということを話の出発点にしたらどうでしょうか。

副題は「日本人の宗教と信仰心について」ですが、この「信仰」は belief というつもりです。既成の大宗教（religion）とはむしろ切れたところで、一般の民衆がもっている、信念といっても信心といってもちょっとちがう、いわばビリーフといったものを考えているわけです。日本人に宗教心があるかないかという議論も、ビリーフを考えに入れるかどうかで分かれるのだろうと思います。B・チェンバレンの明治中期の日本文化論を見ても、日本人には宗教心がないというのが一般の考えであり、チェンバレン自身もそう断定すると書いております。ところがラフカディオ・ハーンだけはこの考えに大反対だとも付け加えています。ハーンはつまりビリーフのほうを強く見たわけでしょう。日本人は組織宗教のもとに一貫した生活をするということはないけれども、カマドの神様、オシャモジの神様、厠の神様などというほうでのビリーフは実にふんだんに持っているのです。

窪　そういうカマドの神様のようなものと大宗教とを、どこでどのように区別するかが問題でしょう。たとえば浅草の観音様にしても、ある人は仏教の仏様としてお詣りし、別の人は仏教などという大宗教とは関係なく、ぜんぜん別のものとして願いごとに行く。このへんをどう整理するかですね。

米山　そういう現象はたくさんあるでしょう。先日も今宮神社に初詣に行ってみると、盛装した仏教の坊さんが何人もお詣りにきている。こういうことは、一つの宗教で塗りつぶされている地帯――たとえば回教圏では考えられないことです。日本の場合は、実に融通無得なんですね。仏教なり神道なりは一応の縄張りはもっているとしても、一般人のほうではそれら全部と適当に付き合ってゆく。仏教だから、神道だからお詣りするというビリーフのパターンはないわけです。

加藤　神様の側のお心づもりとは離れて、人間のほうはユーザーとしての立場で勝手に神様を使っている。

宗教におけるメーカー論理とユーザー論理

梅棹　私は、日本人の心のなかの神様のあり方について、実証的にかなり調べてみたんです。その結果わかったことは、宗教生活におけるメーカーの論理とユーザーの論理のちがいなんです。仏教・神道・道教・キリスト教等々というのは、要するにメーカーなんです。それはそれで完結した論理をもっている。ところが、たとえば家庭のなかで、電気釜はナショナル、冷蔵庫は日立、掃除機は三菱、といった状態はあたりまえですが、宗教もそれと同じことです。心の中では、いろいろなものがいっしょにはいっている。使うほうでは普通は銘柄までは気にもしない。そのなかで、とくに宗教熱心といわれる人は、いわば日立の製品ばかり使う日立教信者といったようなものです。

加藤　ブランド・ロイヤリティの高い人ですね。

梅棹　そうです。ブランド・ロイヤリティの問題です。家庭電気製品でいえば、ヨーロッパだと、うちはフィリップス社のものしか使いませんという家庭があると思うが、日本ではそれはあまりない。神々は多元的資本主義の世界に繁栄しているのであって、ユーザーとしての人間は、各社の電気製品を時に応じて使うように、いろいろな神様のご利益なりなんなりを場合に応じて使うだけのことです。日本人の宗教生活の特徴はここにあるだろうというのが私の考えです。

加藤　宗教実用学ということですが、実用学というのは人間が物なり記号なりを使うときのかかわりの問題であって、そこではずいぶん誤解が生ずる。メーカーである神様とユーザーである人間とのあいだも、ずいぶん誤解の連鎖が多いと思いますが、この誤解というものがいつごろから許されてきたのか、あるいはもともと、メーカーとユーザーの関係というものはルーズなものなのでしょうか。

梅棹　すくなくとも、これまでの宗教研究あるいは宗教史研究というのはすべてメーカー研究だということは明瞭です。いわば業界史あるいは社史の研究ですよ。そうして、いかにして市